

あった。

北魏分裂後の社會にしばしばみられる胡漢の激しい對立は、必ずしも種族問題とはかわらない分裂後の様々な對立が、しだいに胡漢の文化的な對立として塗り分けられていったことによるものであり、北魏史の基本史料である『魏書』も、そうした對立を背景に書かれたものである。

唐代視朝制度考

松本保宣

唐王朝の政策決定の場の一つに、皇帝自ら主宰する御前會議が挙げられる。普通聯想されるのは、朝廷に大事あつて臨時に召集される會議であるが、唐王朝の場合、恒常的に舉行される御前會議が制度として存在し、日常的な政策決定の場として定着していた。むしろこちらの方が遙かに重要である。これこそ朝會儀禮の一環として行われた視朝（聽政）に他ならない。その様態は概ね二系統に分かれる。一つは常朝儀禮に伴い正殿で舉行される奏事であり、もうひとつは正殿以外の宮殿で行われる便殿議政である。前者が場所・参加者・日時が規定された定例の御前會議であるならば、後者は、臨時に任意の参加者を指定できる柔軟な制度であった。具體的な場として、正殿は唐初、兩儀殿であり、その後紫宸殿に定着し、便殿は、宮城の任意の殿から次第に大明宮の延英殿に固定していく。正殿常朝について、「入閣」なる儀禮の存在

と共にその實態が古來議論の的であつたが、概ね前述の如く紫宸殿が中心とみてよい。唐後期では便殿延英殿の議政が、その機能の柔軟性もあつて視朝の中心を占めつつあつたが、九世紀中葉の文宗の改革により紫宸殿が再活性化され、紫宸・延英兩殿の機能が共通化される。御前會議は口頭でなされるが、その議決事項は文書行政にリンクしており、又、宰相主導の案件も皇帝が聽政の場で修整可能で、それがある程度制度化されていた。實質的に王朝最高レベルの政策決定の場と評價されよう。

チンギス・ハーン廟の起源

白石典之

チンギス・ハーン廟（成吉思汗陵）は現在中國内蒙古にある。そこはモンゴル民族の精神的據り所であると同時に、古式に則った祭儀を残していることから、モンゴル文化の研究においても重要な場所となっている。内蒙古にチンギス・ハーン廟の存在が史料で確認できるのは、遅くとも一六世紀初頭といわれている。その源流はチンギスの墓前に設けられた祖宗の靈廟「八白室」にあるといわれ、漠北の地にあつたとされるが、具體的な場所や構造はわかっていなかった。

報告者はモンゴル國アウラガ遺跡で考古學的調査を行い、そこがチンギスの本據地「ヘルレンの大オールド」址であることを確定し、宮殿址とともに、それを改造した特殊な建物址を発見した。

その建物からは香爐などの祭器、即位式に関連するとみられる犠牲獣骨が出土し、祭祀場だったとみられる。その構造は正方形のプランを持つテントで、二〇世紀中頃まで残存していた「成吉思汗陵」のプロトタイプに類似した構造であった。報告者はその建物を、チンギス・ハーン廟の最初の姿であると理解している。

本報告ではチンギス・ハーン廟の初源形態を実証的に提示し、そこでの祭祀活動の實態に迫りたい。また、その建物は出土遺物から一五世紀中葉まで存続したことがわかっていいる。そこで、不明な点の多いポスト・モンゴル時代の漠北についても言及したい。

シーア派聖地アタバート参詣をめぐる諸問題

守 川 知 子

一九世紀のイランでは、隣国オスマン朝領イラクに位置するシーア派聖地アタバートへの参詣が盛んであり、年間數萬人にもほるイラン人がアタバートへと向かつていた。「アタバート」とは、ナジャフ、カルバラ、カーズイマイン、サーマツラーの四箇所にある六名のシーア派イマーム埋葬地の總稱である。一六世紀に成立したサファヴィー朝期以降のシーア派教徒の増加とともに、イラン社會においては、これらのシーア派聖地への参詣もまた、メッカ巡禮に次ぐ重要性を持つようになっていく。

イラクの四箇所の聖地を巡るイラン人シーア派教徒のアタバート参詣の實態は、一九世紀に數多く執筆されたイラン人自身によ

る旅行記から明らかにし得るが、この種の史料からは、イラン人がアタバートを参詣する際の様々な問題點もまた、浮かび上がってくる。イラン人参詣者に關する問題の多くは、これらのシーア派聖地がスンナ派のオスマン朝領内にあることに起因しており、オスマン朝側との摩擦や軋轢、あるいは兩者の認識の差異という形で生じている。

本報告では、一九世紀のアタバート参詣の實態を踏まえた上で、ガージャール朝政府とオスマン朝政府との間で締結された二度のエルズルム條約や、兩國家間の参詣者問題を扱った外交文書を通じて、當時のアタバート参詣の諸問題を検討し、イラン人にとつてのアタバート参詣の意義を明らかにすることを目的とする。

東部アフガニスタンにおけるハラジュの王國

稻 葉 穰

七世紀、現在のアフガニスタン東部、カーブルとザープリスターンの地に成立したテュルク系の二つの王國については、從來それらがどのような集團に起源を持つのが不明であった。しかしながら一九九〇年代に入ってアフガニスタン北部から大量のバクトリア語文書が発見されたことをきっかけに、アフガニスタン古代史に新たな光があたりつつあるなか、このテュルクの起源の問題にも大きな手がかりが與えられた。すなわちそれらの文書によって、一〇世紀、アフガニスタン南東部にいたことが知られて